

第 1 1 8 回 貴 重 書 展

鶴見大学図書館蔵貴重資料展



平成 2 0 年 3 月 2 2 日 (土) ~ 4 月 1 9 日 (土)

展 示 リ ス ト

1. ローランドソン「歯の移植」 ロンドン 1790年 彩色銅版画
2. リヒター「ローマ村の歯抜き人」 ドレスデン 1839年 版画
3. きたいなめい医難病療治 一勇斎国芳画 嘉永6年(1853) 錦絵3枚
4. オルテリウス「アジア図」 アントワープ 1570年 銅版筆彩
5. テイセラ「日本図」 アントワープ 1595年 銅版筆彩
6. ウォーカー「日本帝国図」 ロンドン 1835年 銅版筆彩
7. 出嶋阿蘭陀屋舗景 長崎 安永9年(1780) 木版
8. 伊勢物語 室町時代中期写 伝姉小路濟継筆 列帖装1冊
9. 源氏物語 龍文刷外題升形本 江戸時代前期写 伝一乗院尊覚等寄合書 列帖装54冊
10. 平家物語 室町時代末期写 袋綴2冊
11. 古今和歌集(吉田兼好奥書本) 室町時代中期写 列帖装1冊
12. 後撰和歌集 室町時代初期写 列帖装1冊
13. 百人一首かるた 江戸時代中期写 1組(読札100枚・取札100枚)
14. 貝多羅本ビルマ語経典 19世紀 1巻
15. 不動明王坐像 東寺伝来印仏 百体一版 南北朝時代 額装1面
16. 英学捷徑七ツ以呂波 阿部友之進著 慶応3年(1867) 袋綴1冊
17. 掌中洋学童子訓 小川柳影軒編 明治4年(1871) 銅板折本1帖
18. 改正増補英和对訳袖珍辞書 再版 堀達之助等編 慶応2年(1866) 洋装1冊
19. 附音挿図英和辞彙 柴田昌吉、子安峻編 明治6年(1873) 活版洋装1冊
20. シェイクスピア作品集 N. ロー編 ロンドン 1709-1710 洋装6冊
21. ミルトン「失樂園」 ロンドン 1688 1冊
22. 「シンデレラ、または小さなガラスのくつ」 ロンドン 1825年頃 1冊
23. トマス・ビューイック画「イソップ寓話」 ニューキャッスル 1818 1冊
24. ルイス・キャロル著「不思議の国のアリス」 ロンドン 1869 1冊

1. ローランドソン 歯の移植 (Transplanting of teeth)

ロンドン 1790年(原画1787年) 彩色銅版画

ローランドソン (Thomas Rowlandson, 1756-1827) はイギリスの風刺画家。この絵は当時行われていた歯の移植を描いたもの。わずかなお金のために健全な歯を抜かれるのはみすばらしい身なりの男。その歯が着飾った上流階級の女性に移植されるが、右側は今まさに移植がおこなわれているところ、左側は歯が抜かれるのを待っているところである。

2. リヒター ローマ村の歯抜き人 (Der Zahnbrecher in einem Roemischen Staedtchen)

ドレスデン 1839年 版画

ドイツ後期ロマン派の画家であるリヒター (Adrian Ludwig Richter, 1803-1884) は、数多くのデザイン画、版画を描いた大衆芸術家として著名である。

この絵は19世紀、ローマの村を訪れた歯抜き人、すなわち巡回歯科医を思わせる図で、シルクハットをかぶって馬に乗り、従者を従えて患者を見下ろしている。周囲の風景や動物はドイツのものである。

3. きたいなめい医難病療治

一勇斎国芳画 嘉永6年(1853) 錦絵3枚

幕末の浮世絵師、一勇斎国芳 (1797~1861) の戯画 (ざれえ)、嘉永6年 (1853) に出された3枚続きの錦絵である。

「きたいなめい医」は「奇態は迷医」であり、滑稽とグロテスクを合わせもった難病持ちとそれを治療する藪医者を描きこむことで、当時の世相を諷刺した。その結果、幕府や公家を揶揄しているとして発売禁止処分を受けた。

この画に出ている難病は、右の1枚には「あばた」(以下、画中の表記の通り)、「はななし」、「ろくろくび」、「ちんば」、中の絵には「むしば」、左には「かんしゃく」、「せんき」、「でっちり」などである。

中央左に描かれた虫歯の治療では、医者が大きな釘抜きのようなもので、町家の古女房の御歯黒で染めた歯を抜こうとしており、その手前には木床義歯が二つ置かれている。

4. オルテリウス アジア図

アントワープ 1570年 銅版筆彩

16世紀半ば以降ポルトガル人が日本にやってくるようになったが、その情報を得て描かれたオルテリウスの地図では、日本は関西を少し越えたところで終わっており、豊後は本州にあり、鹿児島は島として描かれている。日本は直立しているように見えるが、緯度線の描き方からすると、むしろ日本は東西に横たわっていることになる。

5. テイセラ 日本図

アントワープ 1595年 銅版筆彩

この図はポルトガル人地図製作者ルイス・テイセラによるものであり、当時最新の日本地図としてオルテリウスの地図帳に採用された。日本の「行基図」を基にしており、本州・九州・四国がほぼ正確な対比で描かれている。この地図をもって西洋の日本地図の新時代が始まったといわれる。

6. ウォーカー 日本帝国図

ロンドン 1835年 銅版筆彩

ウォーカーの地図は、ジョーンズ「日本、朝鮮および韃靼図」(1813)やトムソン「朝鮮および日本図」(1815)の改良部分を結びつけたもので、九州から蝦夷(北海道)までかなり正確に描かれている。

左上の部分図は「長崎湾」の拡大図である。その図の右上に、四角い建物が列をなしている一画が Desima (出嶋) である。

7. 出嶋阿蘭陀屋舗景

長崎 安永9年(1780)刊

その出嶋は、鎖国政策の江戸時代にあって、外国との窓口となった唯一の地である。この図は、安永9年(1780)に長崎勝山町の富嶋屋文治右衛門が出版したものであり、同版は現存数がきわめて少ない。刊行の年代がはっきりしており、建物の配置も正確で、資料的に非常に貴重である。

出嶋は当時一般の人々は出入りが許されなかったため、このような図が人気を博した。

8. 伊勢物語

室町時代中期写 伝姉小路濟継筆 列帖装1冊

伊勢物語は色好みの原点とも言え、また歌道のたしなみとして、必読書に数えあげられていたので、古来、多くの人に盛んに写され、読まれてきた。日本の古典文学の中では、古今集と並んで、写本の数が最も多いと推測される。そのほとんどは、藤原定家が書写した流れを汲む本であるが、定家は何度も伊勢物語を書写し、さまざまに伝来したので、本の整理はそう簡単ではない。これは定家本を孫の為相が写したという本の流れである。鑑定書(極札)に記された姉小路濟継(1470~1518)筆かどうかは疑わしいが、室町時代中期書写本であるのは確かである。

9. 源氏物語 龍文刷外題升形本

江戸時代前期写 伝一乗院尊覚等寄合書 列帖装 54冊

表紙には、薄藍にて鱗形・市松・七宝つなぎ等を刷り出し金銀泥の下絵を施し、中央の金泥雲龍文刷り題簽に定家流の筆で巻名を記す。縦 15.4、横 15.5 センチの升形本。

銀切箔を密に蒔いた瀟洒な見返しに、まま金銀泥霞引。元来紫であったと推測される綴糸も、紺・海老茶に替えられたものが多い。本文料紙は斐紙。

数人の寄合書のようにはあるが、奥書識語はない。若菜下の巻末に貼られた檀紙片の墨書によれば、藤裏葉・若菜上・同下は一条院尊覚の筆という。尊覚（1608～1661）は後陽成天皇の皇子で、興福寺一条院門跡となった人物。他の資料と比較して尊覚の筆とは別と思われるが、ほぼ同時代の書写である。本文系統は青表紙本系。

10. 平家物語

室町時代末期写 袋綴 2冊

藍色無地紙表紙、縦 22.4、横 21.6 センチ。痛みが多く補修を加えてあるが、原表紙か。中央に蠟箋外題を押し「平家物語 卷一／二」と墨書。

目録なく章段ごとに改行しないで書き通す形式。内容は通常に分巻と同じく、巻一内裏炎上、巻二蘇武までを写すが、章段の区切れは必ずしも諸本と一致しない。

全巻にわたり朱の書入れがある。これは少くとも二段階に分かれ、早い時期に章段の始まりを示す合点と章段名、遅れて片仮名傍訓・合符等が記された。

横幅を大きくとった堂々たる写本で、覚一本系本文を持つ。室町時代の伝本として貴重だが、巻三以下を欠くのが惜まれる。

11. 古今和歌集（吉田兼好奥書本）

室町時代中期写 列帖装 1冊

紺色地に菊・唐草等を織りだした金欄表紙、縦 25.0、横 16.7 センチ。その左肩に龍文を刷ったかと思われる題簽の一部が残る。金紙に牡丹唐草を艶刷りした見返し。本文料紙は斐紙。

仮名序・本文・真名序の次に貞応 2 年（1223）7 月 2 日藤原定家奥書を掲げ、さらに「本云／暦応二年（1339）六月廿四日壬子以／宗匠御本書写訖／同廿九日校合之 兼好／加朱点／判」の本奥書を載せる。吉田兼好（？～1352～？）は徒然草の著者として知られるが、南北朝動乱の世にあつて古典研究・書写を熱心に行い、歌書・物語の伝来に貢献した。

12. 後撰和歌集

室町時代初期写 列帖装 1冊

松葉色紙に卍小紋を織り出した緞子表紙、縦 14.5、横 13.7 センチの升形本。見返し金布目紙。本文料紙は斐紙。外側黒漆塗、内側梨地の箱に収納されている。

この1冊には巻九までを収める。全20巻を上下2冊に写したものの上冊で、元来10巻分6括あったか。現在5括墨付155丁を残す。

後半を欠くので奥書はもちろん不明だが、定家本系貞応本・天福本に属する。

室町時代を下ることのないと思われる朱勘物は注目に値するであろう。天福本系為相本墨書勘物に往々一致するが、この本の方が詳しく、かつ史実としても正確である例が多い。

13. 百人一首かるた

江戸時代中期写 1組（読札100枚、取札100枚）

縦 8.0、横 5.5 センチの銀箔覆輪台紙。間似合紙風料紙に金霞引を施した上品な仕上げであり、読み札（絵札）は奈良絵本の趣きを残す古雅な図柄、取り札は散し書きとする。200枚揃って伝来、帙・蒔絵箱入りの丁寧な作例である。

平安時代以来の遊び「貝覆い」に、16世紀後半ポルトガル人が将来したカルタ（トランプに近い）が合流し、江戸時代初期に歌かるたが出現したと言われる。貞享2年（1685）に京都松葉屋が印刷して広めたため、木版刷りのものはかなり残存しているが、手書きのものは少ない。このかるたは現存する百人一首かるたの中では古い部類に属する。

今日百人一首かるたは読み札に歌一首分、取り札に下句を書くのが一般的であるのに対して、この資料は読み札には上句のみ、取り札には下句のみを記す。江戸時代のかるたにはむしろこの方式が多い。

14. 貝多羅本ビルマ語経典

19世紀 1巻

古代・中世のインドで広く使われた書写材料に、棕櫚科の植物多羅の葉を加工した物がある。多羅の葉を短冊に切りそろえ、その上に経文などを書写し、何枚も重ねて、上下に表紙となる板をあて、端にひもを通して綴じたものであり、貝多羅（貝葉）本と称された。中央アジアのカシュガルで発見された4世紀のものが現存最古の貝多羅本である。インドを経て東南アジアの各地に広まり、それぞれ独自の装飾を施されるようになった。貝多羅経と呼ばれるように、内容的には仏典が多い。

展示資料は貝多羅の表面を赤い塗料で塗り、さらに金泥で装飾したものに黒漆で文字を書写している。内容はパーリ語で書かれた経典をビルマ文字で音訳したもので、書写年代は19世紀頃を思われる。

15. 不動明王坐像 東寺伝来印仏 百体一版

南北朝時代 額装1面

東寺伝来の印仏であるが、その来歴ははっきりとしない。縦・横10体ずつの不動明王像が刷られている。彫りも精巧で版面も整っており、保存も良好である。

16. 英学捷徑七ツ以呂波 阿部友之進著

慶応3年(1867) 袋綴1冊

17. 掌中洋学童子訓 小川柳影軒編

明治4年(1871) 銅板折本1帖

慶応から明治初年にかけて、初学者を対照とする英語の入門書が続々と出版された。「いろは」音に相当する英文字の紹介から説き起こす『英学捷徑七ツ以呂波』と『掌中洋学童子訓』を展示したが、他にも「異人詞入和洋五体以呂波」、「泰西訓蒙図解」(挿絵入単語書)、「英国単語図解」などが刊行された。

18. 改正増補英和対訳袖珍辞書 再版 堀達之助等編

慶応2年(1866) 洋装1冊

文久2年(1862)洋書調所の教官堀達之助等が編纂した初版は、我が国最初の英和辞典であり、たちまち売り切れとなった。そのため、4年後に再版されたのが展示資料であり、翌年さらに増刷本が出版された。

英語は活版、日本語は木版という和洋折衷の印刷形式の、当時珍しい洋装本である。

19. 附音挿図英和辞彙 柴田昌吉、子安峻編

明治6年(1873) 活版洋装1冊

Webster 大辞典(1828)の改訂縮約版に基づいて作られた、イギリス人 J.Ogilvie の英語辞書(1863)に依拠して作られた辞書。

最初の挿絵入りの英和辞書であり、横浜で刊行された。

20. シェイクスピア作品集 N. ロー編

The works of Mr. William Shakespear; in six volumes. London, 1709-1710

シェイクスピア(1564~1616)の作品集は17世紀にいくつも刊行されたが、いずれも大型のフォリオ版であり、持ち運びに不便であった。これは八折版、初めての小型版である。しかも各戯曲の初めに、当時の舞台状況を伝える版面の口絵を掲載するという、親しみやすい編集になった。編者のローは当時人気の劇作家であった。

21. ミルトン 失楽園

Paradise lost. A poem in twelve books. The author John Milton. London, 1688.

ミルトンの代表作。1667年の刊行以来、1674年第2版、1678年第3版と版を重ね、これは1688年刊行の第4版。初めて挿絵（画家はJ.B.メディナ）が付けられた。

第3版まではこの半分程度の小さな本であったが、この版からフォリオ版という大型本になった。

22. シンデレラ、または小さなガラスのくつ (Cinderella, or the little glass slipper)
ロンドン 1825年頃刊

ジョン・ハリスが出版した有名な『シンデレラ』。ハリスは、英国児童書の父と呼ばれるジョン・ニューベリーの後継者で、チャップブックとは一線を画した気品ある高価な作品を手掛けた。

23. トマス・ビューイック画 イソップ寓話

ニューキャッスル 1818

The fables of Aesop, and others, with designs on wood, by Thomas Bewick.

挿絵の技法としての木版は、細かな線が出せないことから17世紀以降銅版に駆逐されていた。トマス・ビューイック（Thomas Bewick, 1753-1828）が、銅版刻線具を木版に応用し、堅い木の切り口（木口）に白線を彫りつけ、銅版と同様の細かい表現ができる方法を編み出した。木口木版は、銅版と違い、活字ブロックと同時印刷が可能のため、たちまちページの余白を絵で埋める装飾カットとして流行するようになった。

なお、ビューイックが開発した木版挿絵はロマン派詩人達に迎えられ、ワーズワスはとりわけビューイック・スタイルを愛したと言われる。同スタイルの特徴は、挿絵の内容が直接本文と関係していないことで、余白埋めのカットという性格が強かった。

24. ルイス・キャロル 不思議の国のアリス (Aventures d' Alice au pays des merveilles)

ジョン・テニエル画 ロンドン 1869

木口木版の挿絵を描いたジョン・テニエル（John Tenniel, 1820-1914）はロンドン生まれ、「不思議の国のアリス」および「鏡の国のアリス」の挿絵を手がけたことで知られ、また風刺漫画誌「パンチ」で数多くの風刺画を描いた。戯画化された人物像は痛快で幻想的でもあり、キャロルのメルヘンによく融合した。

ただし、作者キャロルはこのテニエルの挿絵には不服で、新しい作品のための挿絵をクレインに要請したというエピソードが伝えられている。